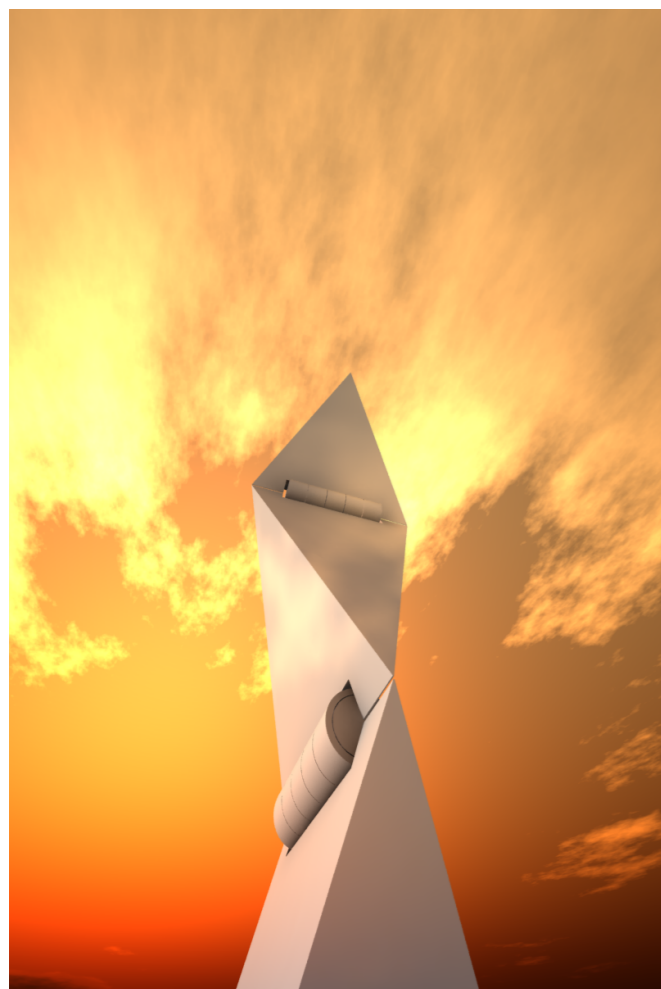


上図は、『記憶する塔』が様々な地震を経験することによって形態を変えてゆく(=記憶を蓄積してゆく)過程の一典型例を示している。本例では、過去に起きた大地震の記録に基づく加速度を時系列に沿って順次与えた。



Concept

この塔は、地震に遭遇する度に自らの形態を変化させてゆく。いわば、地震と「付き合う」ことによって受けた影響を、自らの形態の変遷の中に刻み続けてゆく建築である。

そのような意味に於いて、この塔は、建築が完成した時点に於いて初めて、その形態の創生が開始されることとなる。

これを見る人は、その土地が経験してきた地震の「履歴」を、この塔の姿の中に認めることになるだろう。

この塔の『かたち』は、過去に経験した全ての地震の『記憶』である。

Design

この塔は、三つの四面体から成り、最下段の一つは、二分の一のみが地上に露出している。

三つの四面体は、互いに直交する二軸方向のヒンジを介して接合されている。ヒンジ1はY方向にのみ、ヒンジ2はX方向にのみ、それぞれ回転することができる。

常時においては、各ヒンジは摩擦抵抗により静止しており、一定以上のモーメントが作用した時に、回転を始めるものとする。

また、各ヒンジには、後述の回転剛性をもつ回転バネを組み込むこととする。

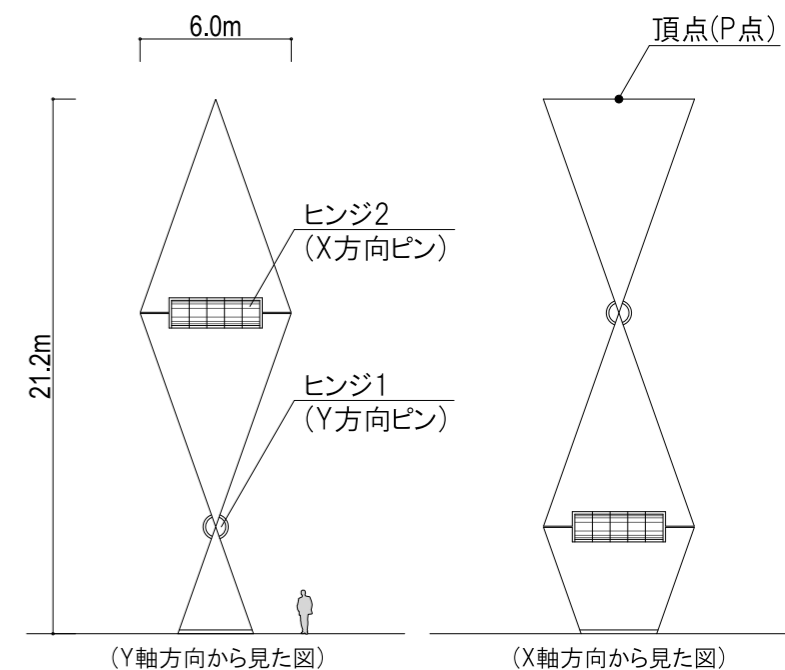


Fig.1 立面図 (縮尺 1:300)